

報告：遍歴磁性国際ワークショップ"International Workshop on Itinerant-Electron Magnetism"

遍歴磁性国際ワークショップ"International Workshop on Itinerant-Electron Magnetism"が、9/25～9/27の日程で理学研究科セミナーハウスにおいて開催された。

本会議では、金属における遍歴電子の示す磁性がどのようなものであるか、またそれに関連してどのような新しい現象が現れるかを議論した。口頭発表は全て招待講演者によるもので、海外からはアメリカ、中国、香港、ドイツ、フランス等からの研究者が新しい研究成果を披露した。参加者数はポスター発表も含めて計81名にのぼり、研究者、大学院生の枠を超えて活発な議論がなされた。

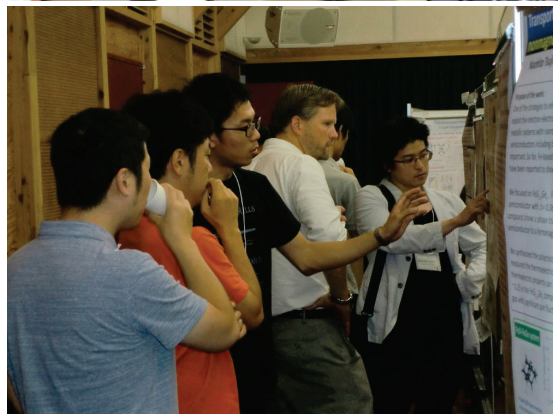
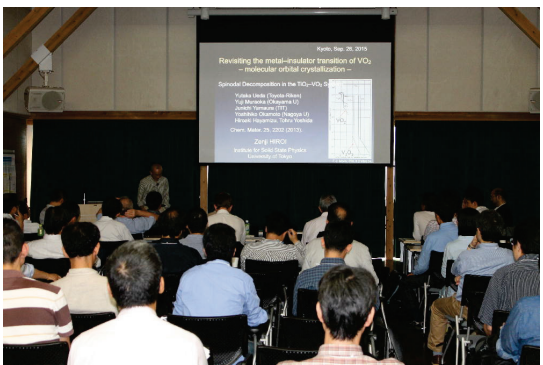
会議では9/25の夕方にGet Together（ウェルカム・レセプション）が開催され、海外、国内遠路からの参加者と交流を行った。9/26は本国際ワークショップの組織委員長である京都大学理学研究科の吉村一良教授によるオープニングの挨拶で、遍歴磁性体の歴史的な発展と今後の展望について講演が行われた。その後、遍歴磁性の第一人者である兵庫県立大学物質科学研究科の高橋慶紀教授による遍歴磁性理論のレビューが講演され、ドイツ・ライプツヒ大学（University of Leipzig）理学部長のJürgen Haase教授による銅酸化物高温超伝導体の発現機構の根幹に関わる実験結果についての講演が行われた。コーヒープレイクをはさみ、フランス・グルノーブルのルイ・ネール研究所のRafik Ballou教授によるフラストレート系遍歴磁性化合物についての中性子散乱実験に関する講演、高エネルギー研究所の門野良典教授による擬一次元スピン系についての μ オン・スピン共鳴を用いた実験に関する講演、東京大学物性研究所・所長の瀧川仁教授によるNMRを用いた重い電子系に関する実験についての講演と、興味深い講演が続いた。昼食をはさみ、東京大学物性研究所の廣井善二教授の講演、名古屋大学理学研究科の伊藤正行教授の講演、日本原子力研究開発機構の神戸振作博士の講演、カリフォルニア大学デイビス校（UC Davis）のNicholas Curro教授の講演、京都大学理学研究科の石田憲二教授の講演が行われ、初日の口頭発表は計11件で、16:00まで続けられた。講演の中では、これまで遍歴電子磁性の理論的発展に貢献されてきた兵庫県立大の高橋慶紀先生の講演が印象的であった。この会議は今年退官を迎える高橋教授のメモリアルも兼ねている。

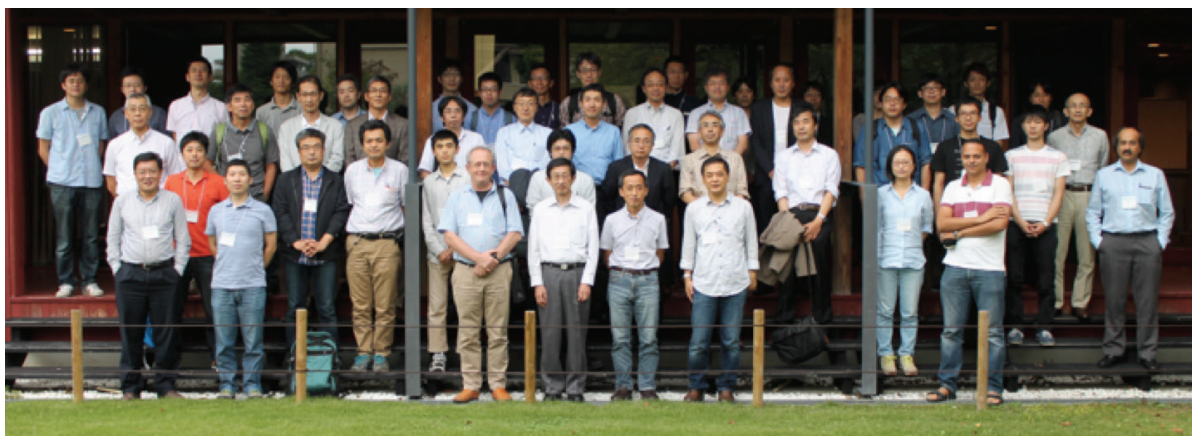
26日夕方16:30から18:30までポスターセッションが行われた。ポスターセッションは海外の研究者から日本の大学院生まで幅広い内容で盛況に議論された。

27日は午前中にコーヒープレイクを挟んで、京都大学工学研究科・和氣剛博士、中国・浙江大学・方明虎教授、兵庫県立大学物質理学研究科・坂井徹教授、香港の香港中華大学のSwee K. Goh教授、産総研・藤田麻哉博士、名古屋大学理学研究科・佐藤憲昭教授による遍歴電子磁性やエキゾチック超伝導に関する招待講演6件が行われ、13:00からの京都大学工学研究科・中村裕之教授によるクロージングの挨拶により閉会した。

全体として非常に活発な議論が行われ、有意義なワークショップになった。以下にその詳細を示す写真を添付する。

なお、この国際ワークショップは、京都大学統合複雑系科学国際研究ユニット、京都大学未来創成学国際研究ユニット、粉体粉末冶金協会の協賛ならびに、京都大学教育研究振興財団、井上科学財団、福田金属箔粉工業株式会社、株式会社サムウェイ、株式会社重田実業、京都コンベンション&ビジターズ・ビューローの助成のもとに行われた。





写真は Get-Together（ウェルカムパーティー）（1 枚）、招待講演における発表や議論の様子（6 枚）、ポスター発表における活発な議論（2 枚）、バンケット（懇親会）での挨拶の様子（1 枚）、全体写真（1 枚）。